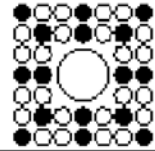


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 25

January 31, 2009



お願い、お願い、またお願い！

2008年度BCJA奨学生選考について

BCJA 会長 齋藤 友博

BCJA 奨学生選考委員長 平 孝臣



会員の皆様、遅まきながら、あけましておめでとうございます。

未曾有の経済危機のなか、BCJAの活動は負けないよう活性化したいと考えています。早速以下のように新役員の担当を決めました。各役員へ皆様

様からのご意見、提案などをお寄せくださいますようお願い申し上げます。平孝臣(副会長・年次幹事勧誘)、島津幸男(会計・名簿)、白鳥令(奨学金)、青柳昌宏(ホームページ・Yahooグループ・ニュースレター)、田中亮三(入会)、山口晶子(総会・懇親会)、以上のほか横川信治、橋都浩平、西田宏子、小野寺麻希子の各氏が奨学金選考を担当します。このほかにも是非役員として活動を盛り上げたいという方をいつでも募りたいと思います。また、数年毎の年次幹事を新設しますので、是非お手を挙げてくださり旧交を温めつつ会を盛り上げてくださ

い。第一のお願いは、今年の奨学生資金として同封いたしました郵便振り込みにてぜひご寄付をお寄せいただきたいことです。一人一人への援助は留学には不十分ではありますが、毎年10人を目標とし、奨学生からは皆様への感謝の言葉をいただいております。

第二のお願いは会員間の連絡や親睦用のYahooグループへ是非参加してほしいことです。活動を盛り上げるだけでなく、通信経費の軽減にもつながります。手続きは別途記載してあります。

第三のお願いは総会、懇親会に是非ご参加いただきたいことです。より参加しやすく魅力ある会となるよう担当役員を新設しましたので、ご意見もお寄せください。

今年はパブ等での年数回の懇親会、ブリティッシュカウンシル代表宅での春のパーティなども計画しています。定期的にYahooグループ、ホームページにアクセスされて日程などを是非ご確認ください。

以上の三つのお願い、この場を借りて懇願いたします次第です。

2008年度BCJA奨学生公募に対して、38名の応募があり、審査の結果、最終的に8名が選考されました。なお、最終的に1名が辞退となりました。以下に奨学金授与者のリストを掲載いたします。2007年度より変更しましたCD-ROMによる電子ファイルでの応募書類提出により、今年度も審査手続きにおける事務処理の負担を大幅に軽減することができました。なお、2008年度奨学金の原資については、例年の10名分に達せず、8名分となりました。

2008年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属/出身校
都竹	正信	London School of Hygiene and Tropical Medicine	Tropical Medicine	北海道大学
谷嶋	典子	University of Glasgow	Nursing and Health Care	大阪府立看護大学
大野	純子	London School of Hygiene and Tropical Medicine	Public Health	東京農工大学
大久保	明	London School of Economics and Political Science	International Relations	慶應義塾大学
石田	泰博	University of Oxford	Business Administration	慶應義塾大学
碓井	健太	London School of Economics and Political Science	Environmental Policy and Regulation	早稲田大学
瀬楽	亨	University College London	Linguistics	青山学院大学、慶應義塾大学
ABE	Shizuka	University of Bristol	East Asian Studies	高知大学、関西学院大学

2008 年度 BCJA 年次総会について

2008 年 10 月 27 日に、ブリティッシュ・カウンシル（研究社英語センタービル内）にて、BCJA 年次総会が開催されました。活動報告（齋藤）、会計報告（島津）、奨学金報告（平）、ニューズレター（青柳）、新役員承認などを議題とした、年次総会の後に、懇親会となりました。懇親会には、新たにご着任の英国大使 David Warren 氏をご招待して、日英交流のよい機会となりました。次の写真が参加者全員による記念撮影です。



英国のユーモア

橋都 浩平



この J.B.プリーストリーが書いた「英国のユーモア」を読んで、僕が英国（人）のユーモアをより理解できるようになったか？という、残念ながらその答えは「ノー」です。といってもこの本の内容がぱっとしないというわけではありません。それどころか目配りが効いた、英国のユーモアについて概観を得るためには、じつにすぐれた本だと思います。それで

なぜ答えが「ノー」なのかといえば、英国のユーモアというのが、われわれにとってはなかなか分かりにくいものだからです。

僕は英国人のユーモアのセンスを認めることにかけては人後に落ちないつもりです。よく英国人は「世の中でもっとも悲惨なのはドイツ人の喜劇俳優だ」なんてことを言いますが、かのごとく悪口をいわれるドイツ人に較べると、英国人は確かにユーモアのセンスを持っていると思いますし、またすぐれた喜劇俳優を輩出してきていることも事実です。しかしもともとユーモアというのは文化、国民性をそのまま反映したのもですから、他の国の人々には分かりにくいものです。そのなかでも英国のユーモアというものは、どうも英国人以外には理解しにくいもののように思われます。英国の学会に行ったときなど、パーティーで学会長の英国人がスピーチをするのですが、だいたいの話は理解できても、みんなにどっと受けている最後のジョークが理解できず、がっかりすることがしばしばです。もちろ

ん英語そのものが理解できない場合もあるのですが、そうではなくて話の内容は理解できても何が面白いのかさっぱり分からない、ということが多いのです。仕方がないので、恥を忍んで周りに座っている英国人に説明してもらっても、どうもぴんときません。他の国からの出席者に聞いてみたら、「実は俺も何が面白いのかよく分からない」ということもありました。

著者のプリーストリーによれば「（ユーモアの構成）要素とはすなわち、アイロニーを感じ取れる能力、ばからしさ（不条理）を感じ取れる能力、ある程度の、少なくとも片足は地に着いている程度の現実との接触、それから、これは一見意外に思えるかも知れないが、愛情である」というのですから、ユーモアのセンスを身につけるのもなかなか大変です。彼はこの本の中で、彼がユーモアのセンスがあると考えた文章や会話を、たくさん英国の小説から引用しています。しかしこれがまたどうもぴんとこないのです。もちろん翻訳で読んでいるためであって、原文の英語であれば、もっと面白さが伝わるのかも知れません。しかしそういったことよりも、われわれの考えるユーモアのセンスとは、いささか違ったものを彼はユーモラスと考えているようです。われわれが面白く感じるようなジョークや場面の面白さは、彼にとっては単なる悪ふざけであって、ユーモアと呼ぶに値しないものなのです。

この本は 1976 年に書かれた本ですので、僕はこの本を読みながら、自分が面白いと思う「モンティ・パイソン」や「ミスター・ビーン」をプリーストリーが見たら、どう評価したのだろうか、と考えていました。そうしたらなんとモンティ・パイソンについて書いた文章が出てきました。「『モンティ・パイソン』という番組は、優れた喜劇役者ジョン・クリーズが主役になる時は特に、私を笑わせてくれたが、彼の共演者たちは彼ほど魅力的ではなかった。この番組にはあまりにもしばしば、真のユーモアからは程遠い、緊張とある種の残忍性が感じられた」うーん、分かったような分からないような。

(HASHIZUME Kohei, 東京西徳洲会病院総長, University of Birmingham 1982-1983)

2005 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドンで学んだ児童精神科と新薬臨床試験

松平 登志子

1. 留学までの経緯

私は日本では小児科専門医として働いていましたが、子供における心の問題を学ぶ必要性を痛切に感じ、日本と医療システムや考え方がより近いイギリスで児童精神科を学ぶ決意を固めました。

2003 年、ロンドンキングス大学の精神医学研究所において児童思春期精神科ディプロマコースを修了し、更にイギリスで学びたいと考えるようになり、そのまま同じ学部の博士課程に進学しました。

2. 留学中の活動状況

私が在籍していたロンドン精神研究所は、1923 年に開設さ

れた、精神科関連の大学院研究機関です。同じ敷地内にはモーズリー病院が附属しており、臨床と研究が同じ場所で行える施設です。

私の研究テーマは「魚油は多動の子供たちの症状を改善するか？」でした。日本の子供たちはもともと魚を多く食べているため、イギリスで多動な子供たちに対する臨床試験を行うことになりました。

臨床試験を行うには研究計画書を書き、それを元に研究費を取り、倫理委員会の承認を得た上で治験薬と偽薬の手配を行う必要がありました。イギリスの臨床試験に関する規約は世界でもトップクラスに厳しく、魚油という処方箋なしで買える食品サプリメントを使用する試験も、新薬と同じ規則に則って治験を行わなければなりません。製薬会社所属でもない私が個人で新薬臨床試験を行うことには、様々な困難が続きまわりました。計画スタートから倫理委員会承認まで、1年以上かかりました。

臨床試験の間には参加者集めのために学校を訪問し保護者説明会を行い、アンケートを作って封筒に詰めて全国各地に送り、参加者が研究室に来るための鉄道・宿泊の手配や送迎までやりました。研究では知能テストや脳機能検査だけでなく、一人ひとりの子供たちやご家族と直接お話をし、普段の生活から食べているものまで記録しながらイギリス文化をより深く知る機会に恵まれました。イギリスのことをあまり知らなかった私には大変な経験ではありましたが、貴重な経験でもありました。イギリスでは臨床試験のデータは外部委員会が常に監視しており、監査委員会やレポートの数も半端ではありません。おかげで英語の申請書類や議事録の書き方を学ぶこともできました。また、データ収集後は脳波やアンケート、血液と食事の分析を自ら行いました。

日本ではまず実現が難しい、小児を対象とした正式な臨床試験をイギリスで、小児科医として行うことができた事は私の将来にとって大きな糧となると思います。

留学中はイギリスの子供たちだけではなく、知り合いになった日本人の方々からの悩み相談も受ける機会が多く、これも大変な勉強になりました。両方の国を比較する事で、日本の外からイギリスを見つめるだけではなく、国外から日本を見つめ直す良い機会にもなりました。

3. 帰国後の活動

2003年よりの長い大学院生活を終え、本年帰国いたしました。私の帰国より前に、私の実家の小児科クリニックには、元眼科医の母による育児支援施設が開設されました。2003年に私と同じ留学先で勉強していた日本人ソーシャルワーカーの友人がその施設で主力となって働いてくれています。

今後は小児科医として働きながらも、子供の心を診る医師としての経験を重ねてゆきたいと考えています。イギリス留学の経験を生かし、日本や海外で、異文化の中で暮らす方々のサポートが出来ればという夢も持っています。まずは、一つ一つできることからやってみようと思います。

私はまず1年に渡る授業と病院での研修が終わった時点で英国の教育システムに更なる興味を覚え、学部長にお願いしてそのまま博士課程に進むことにしました。その際に一番心配だったのは資金のことでした。日本の奨学金制度は年齢制限

があることも多く、日本に所属先を置く必要がある場合もありました。BCJAはそういったハードルがなく、イギリスで学びたい人からの応募に広く門戸を開かれている数少ない奨学金の一つです。今後とも多くの方々にイギリスで学ぶ機会を提供していただけることを期待しております。

(2005年度BCJA奨学生, Institute of Psychiatry at the Maudsley, 小児精神医学)

2006年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドンでの留学生生活を終えて

石澤 久美子

まず初めに、2006年度BCJA奨学生という形で英国留学を支援して下さいましたBCJAの皆様へ厚く御礼申し上げます。ここでは、私のロンドンでの留学生活についてご報告致します。

1. The London School of Economics and Political Science (LSE)について

私は2006年9月よりThe London School of Economics and Political Science (LSE)の修士課程でInternational Political Economy(IPE)を学びました。LSEは、留学前に聞いていた以上に国際的でアカデミックな環境で、特に私が専攻したIPEを研究する環境として恵まれていたと思います。英国外の様々な国からの学生が大半を占めていたため、異なる国の情報に基づき多角的な観点から非常に深い議論をすることができました。また、授業に限らず、様々な国・分野の著名人による講演を年間通じて聞くことができるのも、LSEの魅力の1つだと思います。授業で取り上げられたテーマ・分野における専門家や論文の著者、各国のトップリーダーによる講演を直接聞くことは、非常に刺激的でした。そして、日本に帰国後に感じているのが、留学後も卒業生同士の交流が深いのもLSEの特徴だということです。

2. 専攻内容について

私が専攻していたIPEでは、4単位取得することが求められます(通年の科目は1単位、半期の科目は0.5単位という計算になります)。このうち2単位(1単位はInternational Political Economyの履修、もう1単位は卒論の提出)は必修であるため、実質的に学生が選択できるのは、2単位分の科目のみとなります。私は必修の他に、Politics of International TradeとEconomic Diplomacyを履修しました。各科目は講義とセミナーで構成されており、講義で取り上げられたテーマについて10名程度のセミナーグループにてプレゼン・ディスカッションを通じてさらに理解を深めるという構成でした。講義・セミナーの予習として、事前にrequired readingとrecommended readingを読むことはもちろんのこと、学期中はプレゼンや論文の提出も求められます。そして学年末は、学年末試験に向けた勉強と卒論の作成が中心となります。最終的な評価は、学年末の試験と卒論のスコアのみにより決定されるため、学年末はそれまで以上に勉強が忙しくなります。試験は1科目3時間で、12

問の中から3問選択して論文を作成するという内容でした。私は study group の仲間と授業の復習とともに、回答案等を作成し勉強していましたが、study group を作ったことは、疑問点が明確になっただけでなく、非常にストレスのたまる試験勉強期間において、精神的に大きな支えともなりました。

印象に残った授業内容としては、Economic Diplomacy の授業で取り組んだ「模擬 G8 サミット」が挙げられます。Economic Diplomacy という授業は、外交における交渉術を学ぶ授業でした。そのため、講義は LSE の教授だけでなく、実際に自由貿易協定の締結交渉に関わった政府関係者や学者による講義も行われ、学年末には実践として「模擬 G8 サミット」の課題をこなすことが求められました。この課題というのは、実際に学生を G8 サミット参加国に分け、その参加国の代表として地球温暖化やアフリカ開発等のトピックについて議論し、議長国が最終的に各国の利害関係を調整して結論を出すというものでした。そして、結論よりも、その結論に至るまでの会議での発言内容等の交渉過程が重視されるという課題でした。私は米国代表であったため、特に地球温暖化や京都議定書に関する議論の際は、他国代表の学生から攻撃的な指摘を受け、米国としての立場を反論するのに非常に苦労しましたが、「学説→実践」を経験することで授業の内容に対する理解を深めることができ、非常に印象に残る授業となりました。



3. ロンドンでの生活について

ロンドンでは、LSE の寮に住んでいました。私が住んでいた寮では、キッチンとバスルームを他の学生とシェアするというフラット形式がとられており、私のフラットでは他 3 名の学生とシェアしていました。偶然全員アジアからの学生であったこともあり、同じフロアの他の学生を招いてアジア料理パーティーを開催したり、一緒にキッチンで食事をしたりしながら、国際政治について語り合ったこともありました。また学期中は、勉強中心の生活でしたが、週末はマーケットや美術館に出かけたり、天気良ければ公園で課題のリーディングを行ったりして、気分転換をするよう心がけていました。LSE に限らず、ロンドンという町自体が多文化で様々な顔を持っており、とても刺激的でした。

4. 最後に

私にとってロンドンでの留学生活は、人生の価値観を変えるほど貴重な経験となりました。特に LSE で構築した人脈は、何ものにもかえることのできない財産となりました。現在は、ロンドンでの留学経験を活かし、日本で金融機関のリサーチ部

門に勤務しております。このような留学の機会を支えて下さった BCJA の皆様に、改めて感謝の気持ちを申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(2006 年度 BCJA 奨学生, LSE, International political economy)

2007 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1]

イギリス留学記

吉野 弘

私は 2007 年度 BCJA 奨学金を頂き Liverpool School of Tropical Medicine(リバプール熱帯医学校),Masters in Tropical Paediatrics(熱帯小児科修士課程)を修了することができました。このレターを通じて BCJA をはじめ私の英国への留学について多くの支援してくださった皆様に感謝と留学のご報告をしたいと思います。

私がイギリス留学を志したのは世界で起こっている年間約 100 万人の 5 歳未満小児死亡の実際を知りたいと思ったからです。留学前は静岡の地域医療に携わる医師として、肺炎、下痢、新生児仮死などの子供の病気に関わりました。留学前の診療活動を通じて日頃感じていたことは、早期発見治療により日本ではほとんどが軽快・治癒していく子供の病気がどのような問題によって多く死んでいくのだろうかという事であり、また同時に日本における私の 10 年間の地域医療の経験が世界の小児死亡の削減に貢献できないかという事でした。医師としてのアプローチから国際保健に関わっている多くの諸先輩からのアドバイスを頂き、国際保健を担う一員として歩いていきたいと夢をふくらませ、さまざまな学校・奨学金を検討しました。

最終的に BCJA 以外からの奨学金は得られませんでした。熱帯医学校として歴史があり、小児の健康問題に焦点を置いた修士課程を持つ Liverpool School of Tropical Medicine において 2007 年 9 月から 2008 年 8 月の 1 年間 Masters in Tropical Paediatrics を学ぶ機会を得ることができました。

リバプールでの修士課程では、感染症や非感染症の疾患を中心とした講義や小児領域における問題(栄養、ワクチン、新生児、国際小児保健 etc)の学習、そしてフィールド研究のための技術(プロトコル作成、生物統計学の基本知識、統計ソフトの基本操作など)を学びました。レクチャーを中心とした Taught course ではありましたが、一方的な講義や実習のみではなく、同級生や指導教官とのグループディスカッションやポスター発表、パワーポイントプレゼンテーションを課題として与えられました。各種のメディアを用いてプレゼンテーションを行う教育は、日本の一地方で発表とは関わりがなく診療に従事していた私にとっては胃がきりきりするような経験ではありましたが、それと同時に自分が知っていること、学んだことを人に伝える重要な手段であることを身をもって体験することができました。



修士課程の同級生と教室にて(筆者右から3人目)

私が修士課程の中で得られた最も大きな収穫は、ネパールでの修士論文プロジェクトでした。ネパールのカトマンドゥにある Maternity Hospital で見た周産期医療は非常にセンセーショナルな経験でした。Maternity Hospital は一日 40 件以上のお産を取り扱うネパールにおける数少ない分娩施設で、比較的裕福な家庭の妊婦さんがお産のためにネパール各地からやってきます。私は新生児の発育状態と、それに影響を及ぼす因子(母体栄養、産前検診、社会経済因子など)の関係を明らかにするために、赤ちゃんの診察と、母親へのアンケート・身体計測を実施しましたが、ネパールでの分娩施設における衛生状態は問題点を感じる点があり、治療器具、薬品なども日本とは比べ不足している印象でした。そして亡くなっていく出生後間もない新生児の姿を少なからず目の当たりにしましたが、日本の新生児医療では標準的な治療を受け退院していく病気が生まれた国の違い、経済状態の相違により生命予後を大きく左右することも実感しました。ネパールでは専門的な知識を持たない介助のもと行われる在宅分娩もまだまだ行われており、助産師など専門職の介助による安全な施設分娩のプロモーションは当然行われていくべきですが、施設そのものの量的、質的な改善の必要性も感じました。



ネパールの Maternity Hospital にて

学生としてわずか2カ月の短い期間ではありましたが、ネパールでのプロジェクトで得られたものは、多くの人々(ネパールでの調査に参加してくれた方々、ネパールでの指導教官、私のネパールでの生活を助けてくれたカトマンドゥの人達、リバプールの先生やスタッフ、友達、そして私の家族)に支えてもらいながらこのプロジェクトを行うことができた感謝の気持ち、そして多くの亡くなっていく小児のために国際保健のキャリアを積み重ねていきたいという自分の気持ちを明確にできたこと

でした。

日本の診療現場しか知らない私が海外での実務を経ないで大学院に進もうとするのは時期尚早ではないか? 語学力の不安を抱え、収入のあてもなく妻子を連れてイギリスに行くのは無理がないか? 留学決意に際し多くの迷いがありましたが、BCJA に支援して頂いた事は経済的な部分のみならず、精神的にもイギリスに手を振って送り出してもらった大きな支えでした。家族とともイギリスの人々に支えられ1年間を過ごすことができました。



リバプールの自宅にて

現在はベトナムにおいて小児感染症の研究に関わる research pediatrician として仕事をしております。リバプールにおいて学んだことを実践しながら国際保健のキャリアを少しずつ積み重ねております。まだまだ未熟すぎる国際保健医療の一員ですが、失敗を糧に学ぶ事ができる今の仕事に充実を感じております。私のレポートが新たに海外へ踏み出そうとしている方への支えになれば幸いです。

(2007 年度 BCJA 奨学生, Liverpool School of Tropical Medicine, Tropical Paediatrics)

2007 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[2]

オックスフォード大学における生活をふりかえって

黒田 亜希

私の大学院生活は、2007年10月に始まりました。オックスフォード大学の Politics, Philosophy and Economics 学部を同年の六月に卒業し、最終試験で無事院に進学するために必要な成績を修めることができたので、夏の休暇を終えて大学院での研究を始めました。学部生としての三年間は Oriel College で過ごしましたが、院生になってからは学院生が多く在籍するカレッジに住みたいと考え、あえて住み慣れた Oriel を離れて Wolfson College へ移りました。

専攻科目は Forced Migration。「強制移住」について多様な視点から研究するために設けられたコースで、一年間で修士号をとれるようになっていきます。「難民問題」に関しては高校時代から漠然と興味を抱いていましたが、大学に入って国際関係を勉強したり、アムネスティ・インターナショナルの難民部門でインターンシップをしたりすることによって、「難民」と呼ばれ

ている人々について更に専門的に学ぶ機会を得たいと思うようになりました。オックスフォードでまさにその機会が提供されていることを知り、大学三年生の冬に Msc in Forced Migration に出願することを決めました。

コースを提供しているのはオックスフォード大学の Refugee Studies Centre という機関です。Refugee Studies Centre は、"Queen Elizabeth House"という名称で知られるオックスフォードの国際開発学科の一部として、1982年に設立されました。以来、強制移住の学問と難民支援の実務を結ぶ懸け橋としての役割を果たしています。1951年の「難民の地位に関する条約」で規定された厳密な法的定義によると、「難民」とは「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた」人々のことを指します。しかし「難民」という言葉は広く知られているものの、世界各地で自分の家を捨て、移住を余儀なくされた人々は「難民」に限られません。私が専攻した「強制移住」のコースは、「難民」に限らず、国内避難民や開発、或いは環境上の理由が原因となって住居を失ったその他避難民について、幅広く学ぶことを重要視しています。

私が修士論文で取り組んだテーマは、「The Challenge of empowering refugees: insights from assistance programmes in Sub-Saharan Africa」です。Sub-Saharan Africa とはサハラ砂漠以南のアフリカを指し、多くの難民が発生している地域です。UNHCR (United Nations High Commissioner for Refugees、国連難民高等弁務官事務所)はこの地域で幾つもの事務所を置いて支援活動を行っています。私は、この地域におけるザンビアの「Zambia Initiative」とウガンダの「Self-Reliance Strategy」をケーススタディとして選択した Refugee Aid and Development (RAD) プログラムと、タンザニアとザンビアにおけるプロジェクトをケーススタディとした「Community Services」プログラムについて研究しました。教授陣は世界各地の国際機関で活躍し、国際法、人類学、政治学、国際関係といった多様な分野における研究の最先端で実績を残している先生方が揃っており、論文を書く際、先生方のお話を直に聞けたことや、UNHCR で長年キャリアを積んできた supervisor の先生の人脈や情報網は非常に貴重なものとなりました。このような環境の中で自分の興味に沿って研究テーマを選び、伸び伸びと学ぶことができたことは、本当に幸運だったと思います。

学部生の時にも感じたことですが、院生になって更に強く感じられたのが、社交の場の重要性です。ジャーナルや本を読むだけでは得られない意見や経験談の交換、社会に出ると不可欠となる会話力やネットワーク作り、そして勉強に集中するために何よりも大切な楽しい気分転換、そういったものを全て提供してくれる場が、大学には多く存在します。カレッジ・バー、パブ、スポーツクラブ、ディナーやダンスパーティー、様々なサークルの飲み会など、数えきれないほどの多様性を誇る社交イベントが年中オックスフォードのどこかで開催されています。こういった場を活用してこの一年間の間に出会った人たちは、非常に豊かかつ多様な社会人経験を持っており、話を聞くだけで勉強になることが数多くありました。Wolfson College でも Forced Migration のコースでも私は最年少で、周りには社会人経験を経て大学院に進んできた人が多数いました。同じコ

ースで学んだ国籍多様な友人の中には、NGO、国連、また政府機関などで働いた経験を持つ人がいて、自由時間の友人との会話も勉強になることが多々ありましたし、異なる専攻の友人との会話は、それまで興味が薄かった分野に関する好奇心や知見を生んでくれました。2003年の冬に学部の入試面接を受けに初めて訪れた時から好きだった、歴史と伝統を常に感じさせるこの美しい大学で、沢山の新しい友人、先生、考えや本との出会いで充実した時間を過ごせたことは、感謝してもしきれません。

2008年の学年末試験に無事合格し、院を卒業した後、現在はマレーシアの首都クアラルンプールにある UNHCR でインターンシップをしています。ビルマ、スリランカ、イラク、スーダンなどの国々から来た難民と直接接して仕事をする毎日ですが、大学院で学んだ専門知識はとても役に立っています。今後も、大学院で学んだことを更に役に立てていけるよう、努力していく所存です。

最後に、BCJA 奨学金をいただきましたことについて、この場をお借りして心から感謝を申し上げたいと思います。応援してくださっているということが何よりも嬉しく、またイギリス各地で様々な研究をされている奨学生の皆様によるレポートは、とても興味深く、励みになりました。本当にどうもありがとうございました。

(2007年度 BCJA 奨学生, University of Oxford, Forced Migration)

2008年度 BCJA 会計決算報告書

2007年11月1日～2008年10月31日

(一般の部)

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	1,346,360
会費	23,600
利子	58
合計	1,370,018

支出の部

科目	金額
写真代	5,055
サーバー、ドメイン料	40,446
アルバイト代	70,000
オフィス用品代	6,093
郵便代	53,880
印刷代	97,545
振込料	1,260
交通費	260
ケーティング代	145,440
ホール使用料	10,000
ドリンク代	20,795
封筒代	25,320
合計	476,094

2008年10月31日現在の資産状況

銀行口座残高*	853,962
現金残高	252,362
次期繰越	1106,324

*奨学金返還分 ¥149,475 含む

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	280,568
郵便振込	1,415,000
利 息	294
合 計	1,695,862

支出の部

科 目	金 額
奨学金支給	1,050,000
振込手数料	2,940
アルバイト代	35,000
合 計	1,087,940

2008年10月31日現在の資産状況

銀行口座残高	219,342
現金残高	388,580
次期繰越	607,922

平成 21 年度 BCJA 奨学基金趣意書

平成 21 年 1 月 20 日

BCJA 会長 斎藤 友博

BCJA 会員のご好意で、昨年度も 8 名の新進気鋭の留学生が、英国において、勉学にいそしんでおります。大変な難関から選抜された有為な人材であり、必ずや大きな成果が期待できるものと信じております。

今後も、貴重な英国留学の道を確保するため、またこの留学制度に期待している若い諸君に希望を持ち続けていただくため、会員の皆様から、今回も、広くご賛同を賜りたいと願っております。

前回に引き続き、今年度も、より多くの会員の皆様からご賛同を得たいものと、郵便振込でのご送金とします。

みなさまからのご厚志を心からお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関しては紙面上にて代えさせて頂きまことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男 秘書 川崎

〒102-0082 東京都千代田区一番町 3-3

ニッセイビル 8F (株)ビーユー

連絡先 Tel:03-5211-3855 Fax:03-5211-3858

e-mail:info@be-you.co.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード: 9900

店番: 019

店名: 0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先: ビーシージェイエー(BCJA)

平成 20 年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧

2008年10月31日現在

協賛者総数 71 名 総額 1,405,000 円
派遣者数 8 名 奨学金総額 1,200,000 円

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

吉田 照豊	西田 宏子	横山 昭
北垣 宗治	難破 光義	佐藤 康介
中島 章	小林 哲也	木村 精二
塚原 重雄	山田 昭廣	河合 秀和
浜西 千秋	田尾 憲男	福田 良子
猪狩 忠	柴田 賢	児玉 昭太郎
堤 誠	古川 宣明	高柳 和夫
町並 陸生	山下 純宏	佐藤 修二
木村 浩	桐敷 真次郎	有村 祐輔
南方 暁	森 亘	田邊 和子
石松 須美子	野口 俊一	内藤 健二
平田 富夫	塩田 洋	岡村 定矩
峰本 暉子	青柳 昌宏	菅井 直介
荘口 博雄	小倉 暢之	森田 青平
川本 敏	能口 盾彦	井上 公正
浪田 克之介	米澤 勝衛	西村 閑也
石井 明	矢口 宏	石渡 淳一
柳沼 重剛	杉下 守弘	田中 寿巢雄
北川 正信	橋都 浩平	飯野 正光

三浦 省五	関谷 透	河本 直紀
藤田 道也	斎藤 友博	武内 重二
橋田 坦	横山 俊夫	平 孝臣
清水 護	有富 寛	荒木 喬
匿名希望		

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/> では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(電子メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)

Yahoo!グループ[bcja] および[bcja-com]の

ご利用案内

Yahoo!グループ担当

1) BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Yahoo!グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。既にメンバー登録を開始しております。

登録を希望される方は、下記の URL にアクセスして下さい。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja>

電子メールのアドレスをお持ちでない方、また、個人、会社のアドレスでは何かと不便な方は、yahoo の電子メールアドレス(旅先などで借り物の PC からでも簡単にアクセスできます)が新たに取得できますので、そのアドレスをお使い下さい。

2) BCJA 運営委員専用グループ [bcja-com]も設定されたので、こちらも委員同士の情報交換にご利用下さい。

URL は下記です。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja-com>



[編集後記]

BCJA ニューズレター25号では、BCJA 英国留学奨学金 2008 年度選考結果報告、年次総会報告、2005 年度、2006 年度、2007 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの留学報告 4 件、会計報告、橋都先生からのご投稿などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。なお、例年に比べて、奨学金授与者からの留学報告数が少なかったのは、大変残念です。

編集部では、本レターへの寄稿を募集しております。皆様の研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情、留学体験談など、よろしくご投稿をお願いいたします。一度、原稿をお送りいただきました方々にも、続報をぜひよろしくお願い申し上げます。また、特集テーマ、原稿依頼の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。

編集作業について、お手伝いいただける方を募集しておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。なお、本レター発送については、会計担当の島津様、川崎様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)

